

## 第 17 回例会報告要旨

Y Brasluniau o'r Papurau, y Dau ar Bymtheg,

Mai yr deunaw, 2013

Prifysgol Daito Bunka, Tokyo, Siapan

第 1 部： 特別講演 Rhan 1: Y Ddarlith Arbennig

ウェールズ、イングランド、スコットランドにおけるモードレッド

小路 邦子

**Mordred in Wales, England, and Scotland**

**Kuniko Shoji**

Observing the description of Mordred through the ages from *Annales Cambriae* in the 10<sup>th</sup> century till the 16<sup>th</sup> Scottish chronicles, it becomes clear how different the acceptance of Mordred in time and places is: from a neutral person to a good, excellent fighter in Wales, and then to a vicious traitor to Arthur in England and even in Wales, whereas in Scotland he is the symbol of Scottish resistance to England and his claim for the British throne is justified, not a betrayal. To support this claim, Scottish chronicles present Scots myth asserting its older origin than the British Troy myth, and denounce Arthur as an illegitimate usurper.

『マビノギオン』に含まれる「キルッフとオルウェン」には、キルッフが長々とアーサーの戦士の名を挙げ連ねる件がある。そこにはグワルッフマイすなわちガウエインの名は見られるが、その弟であるモードレッドの名はない。代わりに、同じ名の父ウィアルの息子グラルハヴェトがあるのみである。この二人は並べて述べられているので、兄弟と思われる。一方、「ロナブイの夢」では使者を務めたイダウグが「アルスルとその甥メドラウトとの戦い、あのカムランの戦い」を自分が引き起こしたことについて述べている。

「カムランの戦い」とは、アーサーとメドラウトすなわち英語のモードレッドとの最後の決戦のことだが、この戦いについては、10世紀頃の『ウェールズ年代記』*Annales Cambriae* 537年（第93年）の項にこう記されている。

「カムランの戦い。そこにて、アーサーとメドラウト倒れる。またブリタニアとヒベルニア（アイルランド）に死者あり」

この記述では、アーサーとメドラウトとが敵同士だったのか味方だったのか

は不明で、ブリテン島とアイルランドに多数の死者があったとあるのみで、その死者が戦いと関係していたのかも不明である。しかし、注目すべきはここで初めてメドラウトつまりモードレッドの名が登場して来たことだ。アーサーの名は、『ウェールズ年代記』516年の項にも挙げられている。ここにはバドニスの戦いが記され、そこでアーサーは三日三晩主イエス・キリストの十字架を肩に担いで、ブリトン人は勝者となったとある。このときアーサーが担いだという十字架とは、盾に描かれた十字架のことであろうと考えられている。いずれにしても、アーサーがサクソン人を撃破したことが記されている。

そのカムランの戦いが起きたのは、アーサーの王妃グウェンホヴァルをその姉妹のグウェンホヤッハが打ったためであるということが、ウェールズ古来の伝説を伝えるトライアド53番「ブリテン島の三つの害をなす打撃」に歌われている。次のトライアド54番では、王妃を椅子から引きずり出して打ったのは、グウェンホヤッハではなく、メドラウトになっている。そこで、53番でもグウェンホヤッハをメドラウトに置き換えるべきではないかということをも *Triodd Ynys Prydein (The Welsh Triads)* を編纂した Bromwich は注で指摘している。さらに、アーサーの女性たちの争いがカムランの戦いに至ることになったという、Geoffrey of Monmouth による *Historia Regum Britanniae* (以下 *HRB*) 以前の古い伝説をあらわしているのかもしれないと記している。アーサーには3人の王妃がいたという伝承や、フランスの流布本大系での偽のグエネヴィアのエピソードが思い浮かぶ。トライアド59番では「ブリテン島の不幸な助言」として三番目に、アーサーがカムランでメドラウトと部下を三つに分けることになってしまったことを挙げている。

51番では、アーサーがブリテン島の統治をメドラウトに任せて、アーサー自身は海を越えてローマ皇帝との戦いに赴いたことが述べられ、「ブリテン島の最も不名誉な者たち」の三人目にメドラウトが挙げられている。アーサーは、ローマに遠征して皇帝を殺し、アーサーの部下も沢山命を落とした。アーサーの軍が散開したことを耳にしたメドラウトはアーサーに大逆を働き、サクソン人、ピクト人、スコット人が彼と手を結んでアーサーに立ち向かう。それを知ったアーサーは生き残った者たちを集めて急遽帰国し、力づくでブリテン島に上陸するとメドラウトとのカムランの戦いが起きる。アーサーはメドラウトを殺し、自身も致命傷を負う。その傷が元でアーサーは亡くなり、アヴァロンの島に葬られた、と述べられている。

このトライアドが語っていることは53番54番よりも伝承的には新しく、12世紀前半に *HRB* で述べていることをなぞっている。*HRB* がアーサーの失墜をモードレッド個人の行為に帰しているのは、先の53番54番と共通している

一方、この 51 番ではメドラウトの大逆がその原因となっている。ここから、トライアッドには様々な時代の伝説が混じり合っていることが伺われる。

さらに、トライアッドの補遺 IV として **Bromwich** は「アーサー宮廷の 24 人の騎士」を載せている。その 5 番目のテーマが「アーサー宮廷の三人の近衛騎士」で、2 番目に「カンファルッフの息子スリュウの息子メドロド」が挙げられている。メドロドの名はメドラウトとは形が違うが、1 番目のテーマである「アーサー宮廷の三人の黄金の舌を持つ騎士」の項に挙げられている「カンファルッフの息子スリュウの息子グワルフマイ」と兄弟であると思われる。グワルフマイは、英語のガウェインのことなので、その兄弟であればメドロドはメドラウトと取ることができる。ここには、後の **Geoffrey of Monmouth** 以降の裏切り者のモードレッドというイメージは見られない。この三人の近衛騎士の特性は、いかなる王であれ皇帝であれ、平時における彼らの美しさと叡智のために彼ら三人を退けることができず、一方、戦時においては、その腕が優れているために、いかなる戦士も闘士も彼らに立ち向かうことはできないというもので、このために、彼らは近衛騎士と呼ばれる。

ここに見る優れたメドラウトの姿は、*HRB* にも少し反映されているようだ。最終決戦に突入する辺りで、**Geoffrey** はアーサーに追われてコンウォールに逃げ込んだモードレッドをこう描写している。

「モードレッドはまことに一番勇敢な男で、いつでも攻撃を真っ先に始める」

しかしそれでも、*HRB* では、モードレッドはあくまでも「悪名高き大逆者モードレッド」と断罪される。モードレッドは、スコット人、ピクト人、アイルランド人を同盟に引き込み、その他、アーサーに対して憎しみを抱く者を陣営に取り込み、8 千人の軍を擁して、アーサーの軍を上陸させまいとする。しかし、戦いにおいてはアーサー軍の方が上手だった。モードレッド軍は敗走し、それを知った王妃はヨークから軍団の街へ逃げる。そして、コンウォールへ逃げたモードレッドは、そこでアーサー軍を待ち受けた。アーサーは 6,666 人の師団を率いてモードレッドのいる所へ突撃する。この戦いでモードレッドは落命するが、それが誰の手によるものかははっきりとは述べられていない。アーサーの突撃の中で殺されたので、アーサーの手によるのかもしれない。

**Geoffrey** の *HRB* を英語に訳したラヤモン **Layamon** の *Brut* は、アーサーに妹アンナの子であるガウェインとモードレッドがとても大切な者だ、と述べさせた後に地の文で、「モードレッドが生まれたりしたことは、なんと悲しきことか。そこから大いなる害悪が生じたのだ」と述懐している。さらに、アーサ

一が国をモードレッドに託した時には、王妃とモードレッドの二人が生まれたことが大変な災厄であると嘆く。

ブルゴーニュにいたアーサーは、ある晩夢を見た。まさにそのとき、モードレッド大逆の知らせがもたらされる。軍を半分に分けてアーサーはモードレッド討伐に向かう。上陸したアーサーはモードレッドをウィンチェスターの街に包囲すると、モードレッドは戦士たちに戦わせたまま、自分はサウサンプトンからコンウォールへ逃げてしまい、裏切りを重ねる。コンウォールに進軍したアーサーは、キャメルフォードの Tamar 川のほとりで決戦を行い、川を血で赤く染め、モードレッドも落命する。

このように、初期にはウェールズのモードレッド像は決して邪悪ではなかったのに、イングランドにおいて Geoffrey of Monmouth が *HRB* で描いたモードレッド像がウェールズでも受け入れられ、トライアッドにも取り入れられて行ったことがわかる。また、それとは逆に、アーサーは初めは傑出した人物ではなかったのが、段々と歴史と神話とが融合して、偉大なる王に変化して行った。

13 世紀初頭にフランスで膨大なアーサー王の散文物語集、いわゆる流布本大系あるいはランスロ＝聖杯物語群と呼ばれるものが作り上げられて行き、そこでモードレッドの生い立ちも大きく変化する。彼は、アーサーの妹アンナの子から、アーサーの父親違いの姉との間に、姉と弟とは知らずにできた不義の子となる。13 世紀半ばに *HRB* を英語にした Layamon にはまだその影響が見られないが、13 世紀末から 14 世紀への世紀の変わり目頃にできた英語のスタンザ詩『アーサーの死』 *Le Morte Arthur* はそのフランスの散文大系の一つである『アーサーの死』 *Mort Artu* を訳したもので、ここでは、登場したとたんに「多くの不幸をひき起すモードレッド」と呼ばれている。

同時期の英語頭韻詩『アーサーの死』 *Morte Arthure* では、モードレッドは、アーサーに副官として国を任せられ、上手く収めたなら帰国の暁には我が手で王にしようと言われたとき、自分の力はずつらぬものであると、他の人を選んで欲しいと辞退する。アーサーは、近親の甥であるし、自室に仕える子供の時から可愛がって来たのだからと、辞退することを許さない。遠征したローマで、アーサーは運命の車輪から転落する夢を見た。この夢解きの直後にモードレッド反逆の知らせが届く。戦場でモードレッドを認めたアーサーは、彼の手に王妃に預けてあった自分の二振りの宝剣があるのを目にする。そして、アーサーはモードレッドと相対しモードレッドを討ち取るが、自身も致命傷を負い落命する。

この作品は最後に、アーサーがトロイ王の息子ヘクターの血筋、名高きプリアモスの末裔で、トロイからブリトン人をブリテンに率いて来た者からアーサー

一の先祖は全て出ている、と述べる。落城したトロイから人々を率いて脱出したブルータスの末裔がブリトン人であるということは、*HRB*が各国で読まれたこともあって中世ヨーロッパでは広く受け入れられた伝説であった。そして、ブルータスは自分の名にちなみこのアルビオンの島をブリテンと呼んだとされる。このブルータス伝説はすでに9世紀 Nennius の *Historia Brittonum* にも記されている。14世紀の *Sir Gawain and the Green Knight* もその記述から始まっている。

ところが、それに異を唱えたのがスコットランドだった。エドワード一世がアングロ＝ノルマン人の貴族を使い 1282年に併合したウェールズとは異なり、スコットランドは何百年もイングランドの侵略に抵抗を続ける。*HRB*を根拠に支配権を主張するエドワード一世のスコットランド侵略に対し、スコットランドの貴族は長年対応が揺れながらも、スコットランドとしてのアイデンティティを明確に意識し、国家としての概念の下団結する。1320年にロバート一世支持のアーブローズ宣言を出し、イングランドに隷属する王はスコットランド民衆の手で退けられた。さらに、ノルマン系の領主たちが指揮官として民衆の歩兵を率いることで、イングランドに勝利をして来た。こうした思潮の中で、14世紀初めにヨークシャ・ブリドリントンの修道士ピエール・ド・ラングトフト Pierre de Langtoft によりフランス語で書かれた『年代記』*Chronicle* はスコットランド人の反抗を非難し、エドワードのウェールズ・スコットランド征服を、島の統一を予言したマーリンの言葉の実現として、王を第二のブルート、アーサーの帰還と述べている。しかし、そうしたエドワードの主張に異議を唱え、その主張の無効を教皇に訴えたのが先に述べたアーブローズ宣言であった。

*HRB*によれば、ブルータスの3人の息子たちはブリテン島を3つに分けて受け継ぎ、それぞれの名にちなんで名付けた。ロクリヌスにはロエグリア、カンバーにはカンブリア、一番下のアルバナクトゥスにはアルバニー、つまりスコットランドが与えられた。エドワードは、アーサーがスコットランドを征服したことを根拠にスコットランドとウェールズを征服して、かつてのブルータスの時代のように、一人の王の下にブリテン島を治めようとする。

しかし、スコットランドの側では別の建国伝説を持ち出して、自分たちの方がブルータスがこの島にやってくるよりも先に住み着いていたのだから、征服や侵略を受ける謂れはないと主張し続ける。14世紀ジョン・オヴ・フォーダン John of Fordun の『スコット人の年代記』*Chronica Gentis Scotorum* では、アテネの Gaythelos がエジプトのファラオの娘 *Scota* と結婚し、その後二人はスペインを経てアイルランドに入り、ついでスコットランドにやって来て、彼女の名にちなんでスコットランドと名づけられたのだという。これは、トロイ陥

落よりもローマの建国よりも遥かに前のことで、それ故に彼らはブリテン人よりも先にこの島に住み着いているのであり、アテネとエジプトの子孫であるということを主張する。また、エジプトとのつながりを主張することで、旧約聖書のモーゼの「出エジプト」との関連もそれとなく連想させて、より古いことを強調している。

Fordun の記述は *HRB* を一語一語そのまま写したようにも見えるが、良く読むとアーサーの王位への正当性に対しては「法的には彼のものではない」と書いている。また、「アンナは正式な結婚から生まれた」と述べていることは、逆にアーサーが庶子であることを遠回しに言っているのである。

16 世紀に入ると、このアーサーへの態度はさらに過激になる。たびたび翻訳されたヘクター・ボエス Hector Boece の『スコット人の歴史』*Historia Gentis Scotorum* では、アーサーがいかに不当に王位に就いているかを述べている。同じく 16 世紀編纂のアスローン Asloan 写本に含まれる『スコット人の起源』*The Scottis Originale* では、アーサーのことを口を極めて非難する。ここでもスコタ伝説を語って、我々は「トロイの裏切り者」から出ているのではない、トロイの没落の 30 年以上前にギリシアの Gathele とエジプトの Scota から来ていると主張している、とトロイ伝説を全面的に否定する。そして、アーサーを「暴君」‘tyrand’ と呼び、彼が信頼と約束を違えて戦いを起こしたと非難する。スコット人とピクト人がアーサーを助けてローマ人を追い出したのに、アーサーが裏切ったと非難している。さらに、マーリンの「魔法」‘devilry’の助けにより、コーンウォール公の妻がアーサーを身ごもったのだと述べ、（ユーザー・ペンドラゴン王の）不義の子であるから王冠を被ることはできない、（正規の結婚から生まれたユーザーの娘の子）モードレッドが正当な後継者であるから、アーサーが留守の間にロンドンに行って、自分の権利を示したのだと主張する。

さらにイングランド人は悪魔の直系で、ヘンリー二世は聖トマス・ア・ベケットを殺したということまで *The Scottis Originale* の非難は広がって行く。このように、実際の政治的状況とあわせてモードレッドの正当性を主張することで、イングランドのスコットランド支配に抵抗している。かくして、スコットランドではモードレッドのアーサーへの反逆は、イングランドの支配に対する自分たちの抵抗と重なり、モードレッドの玉座への正当性をますます主張するものとなって行く。モードレッドは、イングランドや大陸における大逆者の姿とは正反対の、スコットランドという国の自立を象徴するものとなるのである。

< Select Bibliography >

I. Primary Sources

*Annales Cambriae*. Ed. Williams ab Ithel. London: Longman, Green, Longman, and Roberts. 1860.

*The Asloan Manuscript. A miscellany in prose and verse written by John Asloan in the reign of James the Fifth*. Ed. W.A. Craigie. Vol. I, Scottish Text Society, New Series, 14 (1923).

Barron, W.R.J. and S.C. Weinburg, ed. and trans. *Laȝamon's Arthur: The Arthurian*

*Section of Laȝamon's Brut (Lines 9229 – 14297)*. Essex: Longman. 1989.  
Benson, Larry D. ed. *King Arthur's Death: The Middle English Stanzaic Morte Arthur and Alliterative Morte Arthure*. University of Exeter. 1986. Repr. 1988.

Boece, Hector. *The History and Chronicles of Scotland*. Trans. John Bellenden. Vol. 2.

Edinburgh. 1821. <http://archive.org/details/historychronicle02boec>  
Boethius, Hector. *Chronicles of Scotland*. Edinburgh, (1540?). Facsimile. Amsterdam:

Theatrum Orbis Terrarum. Ltd.; New Jersey: Walter J. Johnson, Inc. 1977.

Fordun, John. *John of Fordun's Chronicle of the Scottish Nation*. Ed. William F.

Skene. Trans. Felix J.H. Skene. Edinburgh: Edmonston and Douglas. 1872.

<http://archive.org/details/johnoffordunschr00fordrich>  
Geoffrey of Monmouth. *The History of the Kings of Britain*. Trans. Lewis Thorpe.

Harmondsworth: Penguin. 1966. Repr. 1982.

Noguchi, Shunichi. ed. *Le Morte Arthur [British Library MS Harley 2252]*. Centre for

Medieval English Studies, College of Art and Science, University of Tokyo.

1990.

*Tryoedd Ynys Prydein. The Welsh Triads.* Ed. with introduction, translation and commentary by Rachel Bromwich. Cardiff: University of Wales Press.

1978.

## II. Secondary Sources

Alexander, Flora. 'Late Medieval Scottish Attitudes to the Figure of King Arthur: A

Reassessment.' *Anglia* 93 (1975). 17-34.

Barron, W.R.J. ed. *The Arthur of the English: The Arthurian Legend in Medieval English Life and Literature.* Revised ed. with an additional Postscript. Cardiff:

University of Wales Press. 1999, 2001. Repr. 2011.

Barron, W.R.J., Françoise Le Saux, and Lesley Johnson. 'Dynastic Chronicles.' *The*

*Arthur of the English.* 11-46.

Cartlidge, Neil. *Heroes and Anti-Heroes in Medieval Romance.* Cambridge: D.S.

Brewer. 2012.

Coe, Jon B. and Simon Young. *The Celtic Sources for the Arthurian Legend.* Felinfach: Llanerch Publishers. 1995.

Göller, Karl Heinz. 'King Arthur in the Scottish Chronicles.' Trans. Edward Donald

Kennedy. *King Arthur: A Casebook.* 173-184.

Kennedy, Edward Donald, ed. *King Arthur: A Casebook.* New York and London:

Routledge. 2002.

Lloyd-Morgan, Ceridwen. 'The Celtic Tradition.' *The Arthur of the English.* 1-9.

Mapstone, Sally. *'Malory and the Scots.'* *Arthurian Literature XXVIII.* Cambridge:

D.S. Brewer. 2011. 107-120.



McClune, Kate. 'Gawain.' *Heroes and Anti-Heroes in Medieval Romance*.  
115-128.

Purdie, Rhiannon and Nicola Royan ed., *The Scots and Medieval Arthurian Legend*.

Cambridge: D.S. Brewer. 2005.

Roberts, Brynley F. 'Geoffrey of Monmouth, *Historia Regum Britanniae* and *Brut y*

*Brenhinedd*.' *The Arthur of the Welsh: The Arthurian Legend in Medieval Welsh*

*Literatur*. Ed. Rachel Bromwich, A.O.H. Jarman, Brynley F. Roberts.  
Cardiff:

University of Wales Press. 1991. 97-116.

Weiss, Judith. 'Mordred.' *Heroes and Anti-Heroes in Medieval Romance*.  
81-98.

## 編集後記 *Ôl-nodyn Golygyddol*

「日本カムリ研究」*Bwletin y Gymdeithas Astudiaethau Cymreig Siapan* 第9巻第1号/第2号をお届けいたします。本号には2012年11月17日(土)に大東文化大学 板橋校舎3号館にて行われました「第16回例会」、および、2013年5月18日(土)に大東文化大学 板橋校舎3号館にて行われました「第17回例会」でご発表された方より、その「要旨」をご投稿いただきました。ご多忙の中、ご投稿いただきました皆様に厚くお礼申し上げます。お陰をもちまして、ウェールズに関わる幅広い発表の場、意見交換の場となりました。

今後とも会員の皆様のお力添えを賜りますよう、よろしく願いいたします。

編集担当幹事 幸田 美沙

日本カムリ研究 第9巻 第1号/第2号 ¥500.- (送料別)  
2014年2月1日 印刷 編集担当幹事 幸田美沙  
2014年2月1日 発行 発行所 日本カムリ学会  
〒175-8571 東京都板橋区高島平1-9-1  
大東文化大学文学部英米文学科小池剛研究室内

*Bwletin Cymdeithas Astudiaethau Cymreig Siapan*  
Cyfrol 9: Rhif 1 a Rhif 2, y Gyntaf o fis Chwefror, 2014  
Golygydd: Misa Kohda  
Cymdeithas Astudiaethau Cymreig Siapan  
t/o Takeshi Koike, 9-1, 1-chome Takashimadaira, Itabashi-ku,  
Tokyo, Japan, 175-8571  
Cyfadran Llenyddiaeth, Adran Llenyddiaeth Saesneg ac Amerig  
Prifysgol Daito Bunka  
(Department of English and American Literature, Daito Bunka University)